

第3章 大学会館新営予定地M-14・15区の試掘調査

調査地区 本部構内 M-14・15区 (Fig.37 P L 1 - 44)

調査期間 昭和58年12月13日～12月28日

調査方法 新営予定地東半部に設定した3カ所のトレンチによる試掘

調査面積 約130㎡

調査結果 堅穴住居跡、溝、土壇、柱穴を検出した (Fig.38)。第1トレンチにおける層順は上位から第1層：表土 (腐触土および構内造成時等の置土)、第2層：淡黄橙色土層、第3層：淡褐色粘質土層・第4層：鉄分含む黒褐色土層、第5層：暗褐色粘質土層となっており、現地表下約55cmで第6層：黄褐色粘質土層の地山が確認された。第2、4層は厚さそれぞれ8、2cmで無遺物層、第3、5層はそれぞれ15、20cmの厚さをもつ弥生時代から中世の遺物包含層である。検出した遺構には堅穴住居跡1基、溝1条、柱穴、不明遺構がある。堅穴住居跡は壁溝を有するもので一辺約5mの平面形態

方形になるものと思わ

れ、検出面より深さ20

cmの規模をもつ。検出

時に上面より弥生時代

後期の遺物が出土した。

溝は灰褐色土を覆土と

するもので中世に下る

ものであろう。また、

不明遺構は部分的にし

か検出していないが堅

穴住居跡である可能性

が強い。

第1・2両トレンチ

では厚さそれぞれ30、

50cmの第1層直下が第

6層 (地山) となっ

ており、遺物包含層は確

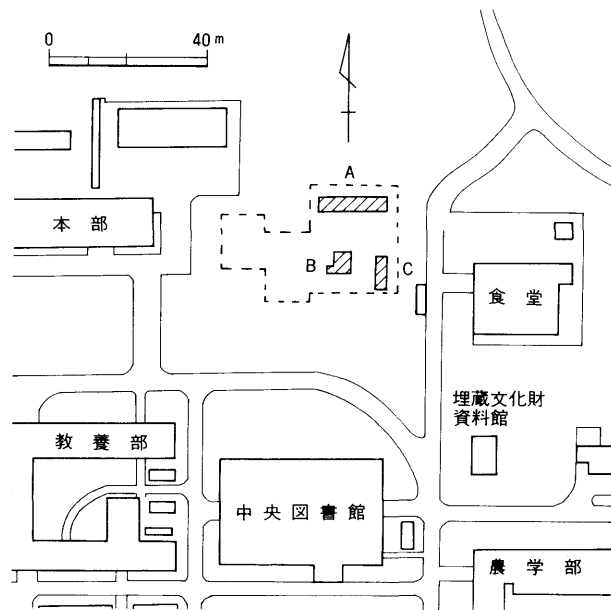


Fig.37 調査区位置図 (2500分の1)

認できなかった。

第2トレンチでは後世の削平により地山が西半部において階段状に約30cm低くなっている。遺構は切り合い関係から暗褐色粘質土および灰褐色土を覆土とする少くとも二時期のものがあり、前者には土壇2基、柱穴、後者には溝2条、柱穴がある。

また、第3トレンチ中央部と第1トレンチ南端部にみられる北から南への落ち込みは構内造成時における削平によるもので、Cトレンチで検出された暗褐色粘質土を覆土とする幅1.1m、深さ10cmの溝は南への延長部を消失している。

なお、昭和56年度に実施した本部構内L-14区の調査で本調査区周辺地域では地山が東から西へゆるやかに下降することが確認されており、第1トレンチにおいて遺物包含層の堆積が認められたことは新営予定地西半部においてさらに良好な状態で遺構が検出される可能性を示唆し、今後の詳細な調査が期待される。

今回の調査で検出した遺構はその存在の確認にとどめ学内の全面的な理解・協力によって現地保存の措置が講ぜられたことを付記しておく。

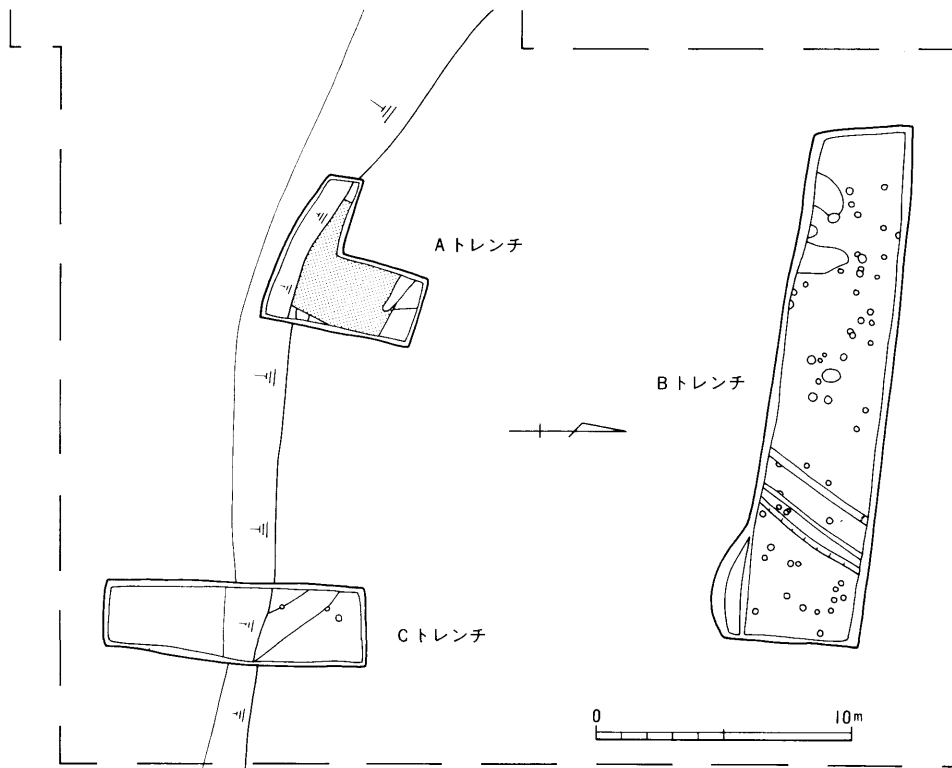


Fig.38 遺構配置図 (300分の1)